The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>山形政昭著「ヴォーリズの住宅-伝道されたアメリカンスタイル」
Author(s)	足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 185-188
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

山形　政昭著

「ヴォーリズの住宅——伝道されたアメリカンスタイル」

著者の山形さんとは建築学会の活動などを通じて懇意にしていただいているが，ヴォーリズのことが話題に上ったことはそれほどなかったように思う。最近はヴォーリズの傑作と言われる肥後橋の大同生命を共同で調査させていただいているので話す機会も増したが，それでも氏がヴォーリズの研究を始める端緒が向井先生のヴォーリズ紹介（1973年12月，近畿建築士連合会・ひろば）にあるとはこの著書のあとがきを見るまで知らずにいた。

もう十五年も前になるが，私もそのころヴォーリズという建築家の存在を先生から教わっただけに懐かしくもあり，また昨今のヴォーリズの人気をみるにつけ時代の変化というものを改めて考えさせられたりした。

当時ヴォーリズと言っても知る人はそれほどいなかったと思う。というより，日本の明治以降の近代洋風建築自体それほど注目される存在ではなかったと言ったほうがいいだろう。私も近江八幡を訪れたり，大丸ビラ（下村邸）などの見学もして，確かに「本物だ！」とは思っても，なにかピンとこないものを感じたことも事実である。建築家としては作風の折衷的なことと相まって捉えどころのなさを感じたものであった。おそらく「ピューリタンはいくら儲けてもいいんですわ。伝道にそれを使うのですから……」という向井先生の単刀直入な指摘がなければ，キリスト教伝道とメンソレータムの販売と建築設計という何とも奇妙な取り合わせを持つヴォーリズという建築家のイメージを一つにつなぎとめておくことはできなかったであろう。

それは今考えてみると，やはり様式建築というものに対する理解が決定的に欠如していることによると思われる。あるいはそうした建築の作り方に対する無関心，ないしは暗黙のうちの反発であろうか。裏返せば，近代主義的な潔癖さというか，首尾一貫したもの，そして何よりも新しい造形を無意識のうちに求めていたことに起因すると思われる。

それは私一人のことではない。建築界全体が様式建築というものから遠く離れていた。歴史様式そのものが，古めかしく，何か鬱陶しく思えたものである。

その後，日本の建築界も急に歴史づいてくる。最近はポストモダニズムという殊更な表現すら躊躇われるほど歴史様式からの引用や参照が日常的に行われ，また，保存・修景といった都市的な関心や保存運動などとのからみで，日本の近代洋風建築も漸く設計者の意識に入ってきたように思われる。

同様に研究についてもここ十数年の間の変化は眼を見張るものがある。当時は研究者も少なく，しかもその分野も明治初期の異人館や様式建築，技術史的な研究などに限られていた。著者も記しているようにヴォーリズもB級のアマチュア建築家と言われたのも当時にあっては仕方のないことであったろう。

その後，村松貞次郎による総掛かりの明治以降の洋風建築の調査が始まり，明治・大正・昭和近代洋風建築小委員会と呼ばれた学会での名称も近代建築部会と改称され，今や学会での発表も他の日本建築史や西洋建築史を凌ぐ勢いですらある。その改称の是非や，研究の方向などについては多くの問題をはらんでいるものの，一方ではタウン・ウォッチングとか建築探偵団とか称して一般の人が街や建築と接する機会を増したことも事実である。

なかでも関西で一際人気の高いのがこのヴォーリズ。我々研究者にとってはヴォーリズの多岐にわたる活動はむしろ理解を妨げるものであっても，一般の人にはむしろメンソレータムの発売者とかキリスト教の伝道者という肩書は親しみやすいものにしているようである。それに心斎橋大丸や神戸女学院や関西学院といったミッション・スクールや各地の教会といったように若い人達の関心を引く建物を数多く残していることも，一層彼を興味ある存在にしている。

最近では磯崎新の主婦の友社の部分保存や神戸大丸南館の保存活用例などもヴォーリズ再評価に一役買っていると思われる。

今やヴォーリズは大正昭和期を代表する建築家として押しも押されもしない存在となった感がある。こうした状況のなかで一般の人にも読みやすいかたちでこの書が出版されたことは，大変時機を得た有意義な企画と歓迎される。山形さんは当初からヴォーリズの意義を見出し，研究を続けてこられたのだからその感慨も一入ではないだろうか。

今回の出版はヴォーリズの多彩な作品のなかでもシリーズの性格上住宅を中心としている。しかし，第一章がヴォーリズの紹介に当てられており，そのなかで各時代を代表する建築作品も紹介されているため，ヴォーリズという建築家の足跡のほぼ概要をつかむことができる。またヴォーリズに関係する様々のキリスト教徒たちの交流のさまも描かれ，建築を離れても興味深いものがある。

第二章以降ではヴォーリズの住宅作品を具体的に取り上げつつ，その様式的特徴や分類，そしてヴォーリズの住宅に対する姿勢を明らかにしていく。この様式分類は言われてみるとなる

ほどといった程度に読み過ごされるかもしれないが，実はなかなか大変な作業ではなかったかと思われる。なぜなら，先にも述べたがわれわれは様式を用いることから長く遠ざかってきたため，個々の様式に対する見識をほとんど持ちあわせていないからである。ましてやヴォーリズの使う様式にはアメリカ西海岸の地方性なども加味されてより複雑で難しかったのではないだろうか。

しかし，より重要なことはこうした様式的な外観ではなく，内部，それも住み手の住まい方そのものにヴォーリズの住宅の特質が現れているという指摘であろう。それは形の問題であるよりも先に住み方に対する提案であると著者は言う。

このあたりのヴォーリズ観は先に出ている「日本の建築――明治大正昭和」（昭和54年，三省堂）の第6巻に示された山口廣の考えと微妙に食い違っていて興味深い。すなわち山口はヴォーリズを所詮は日本の文化には関心を示さなかった人間，アメリカの様式を移入するだけに終わったとするのに対し，著者はあくまで日本人の生活に対する木目細かい提案をした建築家であると結論する。あるいは「アメリカの建築家ではなく，日本で建築をつくった特異なアメリカ人」であるという。表だって山口流解釈に反論してはいないが，従来のヴォーリズ観を一歩進めるものとして注目されよう。

内容はそこからヴォーリズの住宅の歴史的な意義の検討へと進み，当時の代表的な住宅作家の藤井厚二と保岡勝也，アメリカ屋の橋本信助との比較へと論を展開する。しかし，私にはそのまえにヴォーリズが日本の建築界に対してとっていたスタンスをもうすこしはっきりとさせておいたほうが良かったのではないかと思われる。

というのは作品集の序文などをみてもヴォーリズ自身，日本の建築家の世界とは一線を画していたと思われるからである。「現代日本建築に日本古代様式を応用せんとする開拓的事業に携わるものは，須らく日本人が適任にして……吾々は新進日本建築家達のために，西洋建築の解釈者となり，……更に生ける参考書となり……」（ヴォーリズ建築事務所作品集）という抱負からももうひとつの違った道を意図的に歩もうとしていたことは明らかである。

それではヴォーリズの選択の結果はどうであったろう。少なくとも当時の日本人建築家の提案したものと同様に共通の遺産として受け取られている。あるいはそれ以上といえるかもしれない。しかも，キリスト教という絆のもとに建てられ結びついていた多くの作品が，今やそうした絆をとりさっても一般に受け入れられるようになってきている。それはヴォーリズの考えていたようなキリスト教的な世界観の実現というには楽観的に過ぎようが，彼を再考する意味はそのあたりにもあるのではないだろうか。日本人建築家に対案として出された「伝道されたアメリカンスタイル」が親しみをもって受け入れられている，その現在へと至る日本人の生活の変化も一考する必要がありそうに思われる。

ともあれ，この著書は膨大なヴォーリズの作品の住宅という部分を扱いながら，ヴォーリズ

の入門書としては逆に成功することになっている。というのは，これまでややもすると多彩な活動ゆえに建築家としての内面にまで立ち入ることができず，そのために一貫した傾向を持っていないように捉えられてきたヴォーリズについて，むしろ多様な作風のなかに潜む傾向を指摘し得ているからである。

今後は写真なども利用したヴォーリズの建築の魅力を紹介する集成の出版を期待したい。

（足立裕司）